

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	池口 裕駿	指導教員 (主査)	宇野 耕司

論文題目	情動伝染尺度の開発—模倣・同調に伴う基本感情の生起と精神的健康との関連
------	-------------------------------------

本文概要

【問題意識と目的】 情動伝染とは、「他者の表情や発話、姿勢や動作を自動的に模倣したり同調することで感情が生起する現象」(Hatfield, 1992; 1994)と定義され、人が他者の感情を理解し共有することを可能とする共感の重要な構成要素であると考えられている。このような情動伝染の測定尺度として「日本語版情動伝染尺度」(木村・余語・大坊, 2007)が作成されており、共感性や精神的健康との関連が確認されている。しかし、この尺度は信頼性への問題が指摘されており、妥当性にも疑問が残る。また、情動伝染と精神的健康との関連が明らかとなっている(船渡, 2014)が、情動伝染と精神的健康との関連に関して再度十分な検討が必要である。以上のことから、本研究では情動伝染尺度の再現性の検討及びより妥当性の高い尺度の作成、情動伝染尺度と精神的健康との関連の検討を行う。**【方法】** **研究 1 尺度項目の作成** 大学生 73 名を対象に、喜び、悲しみ、怒り、驚き、恐怖、嫌悪の 6 つの感情生起場面それぞれにおける①情動が生起する状況・場面②相手の行動③自身の身体的変化④生起する感情の 4 項目の計 24 項目の自由記述形式質問紙で回答を求めた。結果、収集されたデータに関して指導教員と項目の内容的妥当性の検討を行った結果 56 項目が作成された。**研究 2 既存尺度の追試** 大学生 243 名を対象に、無記名の自記記入式質問紙調査を行った。質問紙構成は①「日本語版情動伝染尺度 (ECS)」(木村等, 2007) ②「感情的コミュニケーションテスト (ACT)」(大坊, 1991) ③「日本語版対人反応性指標 (IRI)」(野村・赤井・森川) ④「GHQ28」⑤「フェースシート」性別、年齢、学科、学年、現段階における希望職種。**研究 3 新尺度と関連要因との検討** 研究 2 の質問紙と同時に以下の 2 つの質問紙加え、研究 2 と同時に実施された。①「情動伝染模倣同調尺度」56 項目 4 件法②「対人コミュニケーションテスト」下位尺度“被影響性”**【結果と考察】** 日本語版情動伝染尺度の追試の結果、先行研究と同様の 4 因子が確認された。また先行研究において検討されていた情動伝染関連要因との関連を検討した結果、非言語表出性、対人反応性指標では概ね先行研究と同様の結果が認められた。このことから、再現性は確認されたと考えられる。しかし、精神的健康とは主に喜びと愛情の感情において弱い関連がみられ、先行研究とは異なる結果が得られた。また、男女差は確認されなかった。このことから媒介要因の存在が考えられる。

また新たに作成した尺度の因子分析の結果、「多チャンネル模倣増加」「複合動作模倣」「眉・回避動作模倣」「口数・視線模倣減少」「瞬間動作模倣」の 5 つの下位尺度が確認され、「情動伝染模倣同調尺度」と命名された。情動伝染関連要因との相関係数を算出した結果、認知的共感性よりも情緒的共感性との関連が大きく、既存の尺度よりもその程度は大きいことが確認された。このことから、新たに作成した本尺度は、情緒的な側面をより反映した尺度であると考えられる。また、精神的健康との関連はほとんど認められず、多チャンネル模倣増加因子においてのみ弱い負の相関が見られた。日本語版情動伝染尺度においても愛情や喜びといったポジティブ感情において負の相関が見られたことから、喜びの感情の影響があると考えられる。しかしながら、関連は弱いものであったことから、これらの尺度が直接精神的健康に影響を与えているのではなく、媒介要因の存在の可能性が考えられる。臨床への応用可能性を考えると、親密性や社会的地位といった関係性要因や自身に生じた他者の感情に対する認知や対処といった要因との関連について検討することで今後精神的健康や共感疲労等の概念へ介入していく手がかりとなると考えられる。